

気鋭の5人による取り組み紹介とクロストーク！

下丸子まちづくり座談会

2023年12月に大田区立矢口西小学校で開催された「下丸子まちづくり座談会」。地域内外で活躍する5名をゲストに、それぞれが取り組むまちづくり事例をご紹介します！ その後はゲスト同士のクロストークも。注目の事例に学ぶ、下丸子の「これから」とは？

おおたクリエイティブ
タウンセンター
野原卓さん

hatome
金井絵美さん

散歩社
小野裕之さん

マイアマイア
アリソン理恵さん

O+Architecture
鈴木美央さん

moderator

初山真人さん
東京工業大学社会工学科卒業、同大学院修了。東京女子大学特任教授。株式会社リライト代表。2016年グッドデザイン賞ベスト100、特別賞受賞。



“とりあえずやってみる”が次のきっかけを生む

初山 皆さんの取り組みを聞いて「担い手の発掘・育成」がキーワードのひとつだと思いました。住民に関わってもらおううえで、大事にしていることはありますか？

鈴木 「無理をしない」ことですね。まちに関わりたいけど、生活に負担が掛かるとつらくなってしまふ。シンサヤママーケットは、複数人で回すことで、忙しい時期はほかの人に運営をお願いできるような体制にしています。

アリ 病気や、子どもが熱を出すとか、いつ何が起こるかかわからないですもんね。

鈴木 だからマーケットの出店者さんにも「当日のドタキャンもOK」って伝えていきます。続けるためには、楽しいって思えるような体制をつくるのが大事。

アリ たえば、町内会やPTAって敬遠されがちですね。でも、メンバーが入れ替わり自由だったら参加したい人も増えるんじゃないかなって思うんです。それは、次の担い手を育てるということにもつながると思います。

初山 そういう意味では、「hatome」は挑戦したい人の入り口になっていると思うのですが、何か工夫していることってありますか？

金井 始めるためのリスクをなるべく下げることでですね。作品やお菓子の委託販売は出店料が掛からず、売上に対する歩合制ですし、告知は店舗のSNSでも行うので、ゼロからお





鈴木美央
(O+Architecture)

O+Architecture 合同会社 主宰。建築設計、行政のアドバイザー、マーケットの企画・運営、公共空間の研究などを行う。著書に「マーケットでまちを変える」(学芸出版社)。

りあげていくことで愛着が湧いてくるんです」

運営は「なるべくお金を掛けない」をテーマに、出店料だけで回る仕組みに。また自走化を視野に入れ、任意団体も設立した。現在では自身が暮らす志木市でも同様に、「柳瀬川マーケット」を開催している。

「大きな覚悟やリスクを持たずに関わりたいと思う人が増えることが、これからのまちづくりの方向のひとつ。関わる人が増えれば、まちは面白くなるし、やがてそこに暮らす人々の居場所になっていくと思うんです」

「マーケット」で生み出す、地域の居場所

埼玉県狭山市にある商店街では、空き店舗の増加を背景に、2020年からシンサヤママーケットを開催している。立ち上げから携わる鈴木美央さんは、これからの商店街の形を自治体や地域住民と一緒に模索してきた。「高齢化・人口減少する中、ただ空き店舗を埋めるのは無責任」という鈴木さんが目指したのは、住民に愛されるコミュニティの場にあること。「知らない人に声を掛けたり、子どもを皆で見守ったり、あらゆる活動が生まれるまちこそ豊かな空間。マーケットは、地域の人たちがつく



ゲストが取り組む事例を紹介！

コミュニケーションを誘発する場づくり

「まちとは市民が生きる場所で、市民がつくっていく場所だと思うんです」

池袋から2駅の東長崎駅で、カフェ・マイア・マイアを営むアリソン理恵さん。ここを拠点にさまざまな活動を行う彼女が心掛けていたのはふたつある。

ひとつは「挨拶をすること」。お客さん同士で会話がしやすいようひとつの大きなテーブルを店の真ん中に、また、通りすがりの人にも声を掛けられるようスタッフはあえて窓側に配置。「ひとりですることは限られているので、プロジェクトを生むた

めには、人と人が関われる機会をつくるのが大切なんです」

もうひとつは、「やりたいことができるインフラをつくること」。「ふだんサービスとして受け取っていることを自分たちの手でイベントにすると、関わる人は増えていく」と考え、店舗をラジオ体操や結婚式の場所として貸し出すこともあるという。

関わりやすい「余白」をつくることでプロジェクトが生まれ、市民同士のつながりが循環していく。それが日常の風景として定着することで、まちは豊かになっていくのだろう。

MIA MIA (マイアマイア) 東京都練馬区



アリソン理恵
(マイアマイア)

一級建築士事務所 ara 主宰。2020年から東長崎で、MIA MIA (2023年グッドデザイン賞ベスト100受賞)、ギャラリー・キオスク1AMを営む。



撮影：Yurika Kono



面白がって使いこなせば、「らしさ」が育つ

小田急線の東北沢～世田谷代田駅間の線路跡地に、2020年に開業したボーナストラック。店舗・住宅一体型の4棟と商業棟で構成される同施設は、発酵食品の専門店やレコードショップ、本屋など個性的な15のテナントが入居する「長屋スタイル」の商業施設だ。

「賃料が高いとチェーン店しか借りられずに、そのまちらしさが失われてしまう」と考えた小野裕之さんは、デベロッパーであり土地を所有する小田急電鉄と条件をすり合わせながら、個人がチャレンジしやすい環境づ

くりを目指してきた。ほかに、小伝馬町では8坪4階建てのビルをリノベーションし、本屋やイベントスペース、レジデンスなどが集まる(※開業当時)「ANDON」の運営、さらに2022年に閉館した「世田谷ものづくり学校」の跡地活用事業にも携わるなど、さまざまなプロジェクトを手掛けている。「とにかく面白がりながら、自由に使える場所を増やしていきたい。まちに眠っている空間を大人が使いこなす。それがそのまちらしさを育て、次の世代にも循環していくんだと思います」



小野裕之
(散歩社)

散歩社代表。NPO法人グリーンズを経て、小伝馬町でビル再生を手掛ける。2020年下北沢に現代版商店街「BONUS TRACK」を開業。2021年グッドデザイン賞ベスト100受賞。

下丸子まちづくりマガジン | Meet-Up Shimomaruko

BONUS TRACK (ボーナストラック) 東京都世田谷区

「地元」だけじゃない 第二の故郷との関わり

客さんを集める必要がないんです。
野原 とりあえず始めることで、新たな広がりが見えてくることってありますよね。おたおたオープンファクトリーは、今でこそ子どもの参加者も多いですが、始めた当初は、どちらかといえばものづくりに関心のある大人向けでした。
小野 そうだったんですね！
野原 でも続けていくうちに「もっと多くの人に現場を見てほしい」という次のやりたいことが見えてきて、今の形になったんです。
金井 挑戦することで新しい出会いも生まれますし、周りからの反応がもらえるので、次のステップにも生かせると思うんです。

初山 せっかく「hatome」で挑戦して力を付けた人たちがまちを出ていくことや、次の拠点として別の土地を選ぶこともあると思うのですが。
金井 もちろん下丸子に残ってくれたらうれしいけど、まずはその人の選択を尊重します。自分が望んでいる土地のほうに愛を持てるだろうし、それはお客さんにも伝わるはず。だから、むしろ別の場所を紹介することもあります。

アリ すばらしい！

金井 もし親身に自分のことを考えてくれる人がいたら、そのまちを離れたとしても、その人との関係は続いていくと思いますね。

小野 同感です。散歩社で現在リニューアルを進めている「世田谷ものづくり学校」でも創業支援をしていただ



のですが、卒業



ひとつのお店が街中をつないでいく

カフェやシェアキッチン、コワーキングプレイスにアートギャラリー、レンタルスペース、ショップ……。築約50年の古民家を改装し、2022年に下丸子にオープンした「hatome」は、さまざまなコンテンツが共存する複合施設だ。「地域の人の居場所になりたい」というオーナーの思いを受け、金井絵美さんが所属するボンボヤージュが店舗全体の運営を行っている。

地域内外の作家がハンドメイドのアクセサリや小物を委託販売したり、壁を展示スペースとして低価格で貸し出したり、気軽に「小商い」に挑戦できる仕組みを備えているのも特徴だ。「ゼロから自分のお店をつくるのは大変だけど、『hatome』だけ

ら始められたという、出店者の声も多いですね」

曜日ごとにシェフが変わるランチも人気で、いつ誰が担当するかをSNSで毎月発信、シェフの思いや出店したきっかけを紹介する動画も公開している。「飲食を入口に、つながりを増やし、まちの人とともにお店をつかっていきたい」

最終的にはボンボヤージュは運営から離れ、自走化する形を目指しており、市民が今後も関わり続けられる仕組みづくりを心掛けている。

「私は地域の人に育ててもらったので、今度は自分がまちに貢献したい。『hatome』とまちをつなげて、愛される場所にしていきたいですね」



金井絵美 (hatome)

大手カフェチェーン店でバリスタや店舗マネジメントを経験後、ボンボヤージュのスタッフとして2022年からhatomeに携わる。2023年からは店長(コミュニティー・ファンリレーター)を務める。



地域の価値を発掘し、育てていく

2017年、「モノづくり」をベースにしたまちづくりを目指して設立された「一般社団法人おおたクリエイティブタウンセンター(以下、OCTC)」。

2009年から大田区のまちづくりに関わり、同組織のセンター長を務める野原卓さんは、大学で教鞭を執る傍ら、関内の路上を活用したイベントや、伊豆長岡温泉のフリーマーケットなど、数多くのプロジェクトに関わっている。「仲間まわし」の文化を持つ大田区には、独自のものづくりの精神が根付いているんです」

2012年にスタートし、13回目を迎えた昨年は約30社の工場が参加、ねじまき隊と呼ばれるボランティアスタッフは数十名を数え、まちの一大イベントとなっている。

OCTCが運営を行う「くりらぼ摩川(P.3参照)」では、職人とお酒を飲みながら話ができる「町工BAR」や、専門学生と工場がコラボしたカプセルトイの販売も人気だ。

「地域の魅力を浮かび上がらせる活動が同時多発的に起こると面白いまちとして認知される。すると地域間の交流が生まれ、盛り上がっていくと思うんです」

その一方で、近年では騒音などの問題によって、シャッターを閉めて作業する工場が増加し、住民との間に距離が生まれている、と野原さんは話す。そう



野原卓 (おおたクリエイティブタウンセンター)

一般社団法人おおたクリエイティブタウンセンター センター長。横浜国立大学大学院准教授。全国各地で都市デザインを実践、都市デザインマネジメントの研究・実践活動も行う。



業者が区内に定着するのはなかなか難しかったそうです。そのまちに定着してもらうには、政策支援などの後押しが必要。あるいは、ポーンストラックのように地元の不動産オーナーと協力して、賃料を下げる工夫をするとか。



「**初山** アリソンさんが東長崎に着目したきっかけは何だったんですか？」
アリ 東長崎は個人店が並ぶ昔ながらの商店街があったり、手塚治虫さんが若手時代に暮らしたトキワ荘があったり、古き良きまちなんです。訪れたときに、そんなまちの雰囲気、オーストラリア人の夫と「エキゾチック！」ってめっちゃ盛り上がった(笑)。
野原 いいですね。下丸子がある大田区も商店街や町工場に住宅街、さらに羽田空港まで揃っていて、こんなに豊かなまちはなかなかないと思うんです。
初山 住人や通勤者もいるので、まちに関わる人も多いですね。
金井 人手不足で定休日が多かったり、宣伝がうまくされていなかったりするけど、魅力的な個人店も多いです。
野原 私は学生と一緒に活動もしているのですが、メンバーは毎年必ず入れ替わるのですが、今でもわざわざ手伝いに来られるOBやOGもいます。何かに残るものがあれば、第二の故郷となり、人とまちの関係性は続いていく。そういう人たちを増やしていくことで、まちの新たな代謝はさらに上がっていくと思います。」